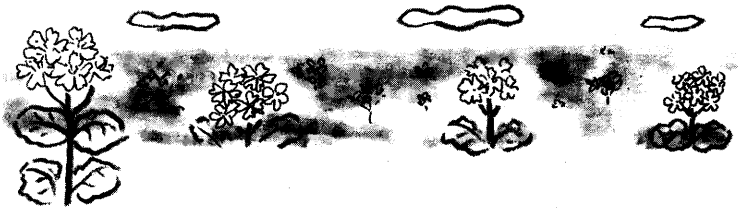
巻頭言

引き受ける父親

井原成男

最近、ここ二十年くらいにわたって育児雑誌に書いたり育児について講演をしたりした記事を、『育てなおしの子育てカウンセリング』（井原成男著、福村出版、二〇〇八年）という本にまとめました。ちょうど下の息子が二十歳を迎えたので、私の子育て歴も二十年を超えたことになります。自分の子育てと並行して、小児科の心理臨床の仕事をしてきましたので、息子が成人を迎えたところで、私の父親兼カウンセラー業も一段落したことになります。このことはこの二十年を振り返るよい機会でした。今回は、その本を作るプロセスでさまざま考えたことを、次のステップのための里程標にしたいと思います。

初め、このような古い記事を出版することにためらいましたが、周囲の意見を聞いてみて、育児の本質は何ら二十年前と変わっていないと感じました。一言で



いうと、「子どもの育ちゆく環境をできるだけ良質なものにし、子どもの心を抱える環境を整備すること」です。それは、母親の胎内から始まる環境を保証し、母親が子どもを受容するのみではなく、それを支える家族や環境があることを意味します。関係者の支援体制も、イギリスの精神分析医ドナルド・ウッド・ウィニコットのいう「ホールディングな（抱え込み支える）環境」[注]に含まれます。これは変わりません。

大きく変わったこともあります。それは、社会情勢ー派遣社員問題や若者の格差問題に代表されるように、社会構造や若者が社会に旅立つための環境は、ここ二十年の間に格段に悪化しました。そうした状況を背景にして、子どもの成長において、家族の占めるウエイトはさらに大きくなりました。今の若者に親の過保護という、かつての指摘を当てはめると、事の本質を見誤ってしまうように思います。今や、「家族」は若者の成長を保証する「最後の砦（とりで）」となりつつあるのです。そうした状況を背景にして、母親の重圧は極限に達し、母を支える父親の育児参加は必須のものになりました。かつて流行したニューファミリーの〝ファッションのような父親の育児参加〟では立ち行かなくなっています。

昨今の子育てが絡む事件を見ると、母親が果てしなき重圧を抱え込んでいるのとは対照的に、父親がまるで他人事のようであり、わが子の状況にコミットしていない姿が映し出されることが多いようです。一言でいうと、家族という船を引

き受ける船長がいないのです。それは現在の社会が、他人の自己責任を問うのみで、自らの自己責任を放棄するという、責任放棄の社会になりつつある反映だと思うのですが、そのことについてはこれ以上深く問わないでおくことにします。

たとえば、昨年六月に起きた秋葉原通り魔事件で明らかになった事実に、一方では育児支援に大金を出資している会社が、派遣の若者に過酷な労働条件を強いていたというものがありました。そうした事実からわかるのは、かつて会社がなけなしにもっていた家族主義ーそれによって、生産性は必ずしもよくなかったのでしょうが、「原家族」において劣悪な親体験しかしてこなかった若者を、家族主義の会社が育て直す機能をもっていたのも事実です。しかしそれは失われてしまいました。現在のアメリカナイズされた市場原理主義の台頭により、そうした自然な支援を望むことは無理になったのです。

私は比較的子育てに参加したほうで、家事や育児をこなしてきたつもりでしたが、あるとき決定的に欠けていたものに気づかされる体験をしました。それは、母親がわが子をその一身で引き受けているのに対し、父親である私は、根本的にはお手伝い意識から脱却できず、本当の意味では育児を引き受けていなかったという気づきでした。おそらく、本質的なところで母親たちが最も夫に感じている不満は、すべてを自分が背負わなければならない、瞬時もその責任から解放されることがないという重圧感です。それはたとえば、育児の難しい発達障碍児をも

つ母親にとって容易に見て取れる現実ですが、そうでない親にとっても、困難に遭遇したときに共通してもつ感慨ではないでしょうか。

母親が不始末をしでかし、おぞましい結果に至ると、人々は母親の心の闇に何が起こったかを追究し、理解の複雑さに立ち止まり、やがて思考を停止させます。こうした事件の原因を心に限定して追究しても無理なのです。

もしかしたら事は単純かもしれない。心に闇などはなく、原因はその母親を取り巻く人々の中に、その母親の重圧を一瞬でも引き受ける人がいなかったことに尽きるのかもしれない。

私はそのことに気づいたのです。それこそ、父親が担うべき責任に違いありません。

私はこの認識をもとに、「新しい父親論」を書き下ろし、育児参加のさらなるステップにしたいと考えています。

（お茶の水女子大学　発達臨床心理学）

注

『遊ぶことと現実』（D・W・ウィニコット著、橋本雅雄訳、岩崎学術出版社、一九七九年）など、亡くなって四十年たっても、世界中で読み継がれている。『両親に語る』（ウィニコット著作集5、井原原成男・斉藤和恵訳、岩崎学術出版社、一九九四年）は、彼のラジオ放送に基づいて書かれており、きわめて読みやすい。